

リレー随想

昔のことを思い出して、いろいろ書いてみる。結果、何となく楽しかったような気持ちになるが、実際に動いているときは、大変だったような気もする。しかし、この大変さこそが、幸せと表裏一体をなしているのだらう。

私が信心しているところでは、「難はみかげ」と言い、また、お世話になっている団体では、「苦難は幸福の門」と教えてくれている。先日、お世話になっているところの理事長の話を聞く機会があって「苦難を克服して幸福になるものではなくて、苦難そのものが幸福なのです」とおっしゃったのが何となく印象に残って、自分なりに考えてみた。

目の前に事が起これば、当然それに振り回される。振り回され続けているうちに、何らかの結論を出さざるを得なくなると、それを幸にするか不幸にするかは本人次第。苦難にあるのではない。この随想を書くことがまさにそれで「苦難」題材は

苦難福門

土地家屋調査士

田口 一法さん



幸福(作品)の門なのである。

苦難を幸福にしなければならない秘けつは、普段から、整理整頓を心掛けることとも教えてもらっている。そこかもしれないが、自分自身出来ていないので、偉そうなお話は言えない。

私が信心しているところの教

師は今年、米寿を迎えられた。十数年前に白内障を患い、今では、ほんのわずかの視力しか残っていないとのこと。ご結果というところで、いろいろのことを、神様をお願いしていたくわけだが、そこで教師と向き合いながら「先生、目の見えんけん、不自由かでしょう」。家内が心配そうに「言いつつ、いや、そんなこともないよ」と笑っておられた。

外に出るのは、さすがに以前のようにはいかないけれど、家の中では長年住んで、壁を伝いながらでも、(一)(二)結果(三)まで来れるし、(二)に来れば、どこに何があるかは、目が見えなくても、すぐに分かる。そうおっしゃって、机から引き出しを出すと「(一)に鉛筆、(二)に消しゴム……」と「(一)ひとつ指差して「神様の御用をさせていたただくのに、何の不自由もな(二)と、言っておられた。

「先生、すごいー」。私も家内も目を丸くして、引き出しの中に目をやった。教師は多くを語らないけれど、大事に、きれいに並べられている道具の「ひとつ」が「幸せ」というのは、こういうことなんだよ」と、雄弁に物語っていた。

(熊本市花園、47歳)